

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

東京大学

理科(前期)

科目	数学
----	----

総括

試験時間	150分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	120点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

近年の高いレベルが維持されており、受験生にとっては相当困難を感じるセットであろう。各設問の難易差が比較的明白であるので、解くべき問題の取捨選択が鍵になることは近年の傾向のままである。特に今年度は、第1問(2)が容易ではなく、出鼻をくじかれたかもしれない。計算力とともに着想や発想がポイントになる問題が多く、解答を記述しにくい問題もあって、制限時間内で答案の形にするのは非常に難しく、数学が得意であっても高得点は容易ではない。内容的には、微積分、確率、平面座標や複素数平面、整数等、東大理科らしいセットであった。

〈特記事項・トピックス〉

東大理科頻出の立体図形・空間図形の本格的な問題が(わずかに空間図形と絡む問題が1題あったが)見られなかった。昨年と同様に数学Aの「数学と人間の活動」に属する整数が出題された。定番の求積問題(図形の面積や立体の体積を求める問題)の出題が見られなかった。文科との共通問題が1題、ほぼ共通の問題が1題とあり、3年ぶりに共通問題が復活した。

〈合格への学習対策〉

類型化された問題をきちんと解ききり、論理的に記述する学力を養成することは前提として、手を動かしながら問題を深く考え抜くことを通してその本質をつかむ訓練を積み重ね、思考力・応用力を培うことが重要である。同時に、解決の見通しを立てられた問題については、確実に結果を導出するための計算力や表現力も必要である。質と量の両面における数学力の研鑽が肝要なのである。駿台のテキストおよび過去問の徹底した研究は有効な対策となろう。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1	記述	Ⅲ Ⅲ	微分法 積分法	関数の最大最小と定積分の評価に関する問題。(1)は容易だが(2)はやや難しい。加法定理で被積分関数を書き直してから評価することがポイントで、(1)の変域がヒントになる。	やや難
2	記述	A	確率	平面上の長方形状に並んだ $3n$ 個の格子点から3点を選んで三角形ができる確率を求める問題。余事象を考えれば容易に解決に向かう。(理文共通問題)	易
3	記述	C II C	空間座標 図形と式 いろいろな曲線	点の軌跡と線分の通過領域を求める問題。座標空間内に問題設定されているが、実質的に座標平面上の問題である。(2)では $OM \perp PQ$ に着目して立式するとよい。	やや難
4	記述	II II II	微分法 三角関数 図形と式	3次関数のグラフの3本の接線で正三角形を作る条件とその面積の最大最小に関する問題。なす角の条件を傾きと \tan で捉えるのが通常である。交点の座標がきれいに表されることにも注目するとよい。(理文類似問題)	やや難
5	記述	C	複素数平面	複素数の3次関数の変換による単位円の像がある条件を満たすための点の条件を求める問題。(2)では $z - \alpha$ の偏角の考察がポイントになる。(1)がヒントになる。	やや難
6	記述	A	整数	正の整数の約数について、3で割って1余るものと2余るものの個数に関する問題。(1)の実験を通して個数をうまく数える方法をつかむことがポイントになるが、単純ではなく感覚的にわかっていても解答の記述がしにくい難問である。	難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。